

応用的研究に関して熱弁下さった。

続いて、光と生命体へと話が移り、三室守先生（京都大学）の概説に引き続き、基礎生物学研究所の和田正三先生が葉緑体の光感知と細胞内移動について、総合研究大学院大学・基礎生物学研究所の渡辺正勝先生がミドリムシの光センサーについて、生理学研究所の鍋倉淳一先生が二光子顕微鏡による脳の神経ネットワーク観察について講演された。

すべての講演の後には立花隆氏が質

問やコメントをする時間を設けた。同氏の時には刺激的な質問やコメントは聴衆が違った角度から講演内容を捉えるのに役立ったと考えられる。また、最後の総括では、立花隆氏が、光科学は幅広く生活に関係し、今後日本の技術発展にどれほど必要で重要であるかを述べられた。閉会の辞として、分子研の中村宏樹所長が今後の光科学の展望と多くの方の静聴に対する謝辞を述べ、会は終了した。

前回に引き続き今回もほとんど途中

で席を立つ参加者もなく、朝10時から夕方5時30分まで終始大盛況であった。話題が豊富すぎ、プログラムがタイトすぎだったかもしれない、お昼の休憩や講演の合間に展示の説明をする時間がほとんどとれなかった。それでもわずかな時間に多くの方が展示にも足を運んでくださった。参加された方の長時間にわたる熱心なご静聴と自然科学への熱い想いに感謝したい。

（松本吉泰 記）

News

分子科学研究所 一般公開

分子科学研究所の一般公開は3年毎に実施されており、平成18年が山手地区の分子研部分が公開される初めとなった。春から技術課を中心に準備が進められ、公開展示班、講演会班、資料作成班、設営班、記録班、広報班、総務班を形成し準備を進めてきた。特に、広報室により鮮やかな青を基調としたポスターやチラシが作成され、広報活動が展開された。テーマは、「モノの始まり：ナノの世界へようこそ」というもので、今回は、全研究室を公

開するのではなく、研究室やセンターなどの希望を取って明大寺地区12カ所、山手地区13カ所が公開されると同時に、山手地域で3回の講演会、またそれぞれ3テーマずつの「おもしろ体験イベント」が行われた。

一般公開展示は、それぞれの展示会場では担当者があらかじめ準備した説明用パネルも利用して展示内容の説明にあたった。また「おもしろ体験イベント」は、一般公開参加者自身がより積極的に参加できるもので、明大寺地区において「電波のチカラ」、「メタルクラフト」、「作ってみよう！ 光を虹に分ける道具」の3テーマ、山手地区において「分子を測る」、「低温の世界」、「分子を創る、見る、触る」の3テーマで実施した。これら体験型イベントも、終日多くの参加者で賑わっていた。一般公開参加者のアンケート結果をみても、体験型イベントに対する評価は高いものであった。

公開講演会は山手3号館2階の大会議室で午後3回開催された。まず岡崎進教授が「ナノの世界をスーパーコンピュータで探る」という題名で、分子研のスーパーコンピュータの性能と

体験イベントで分子模型を作成する小学生



それを用いた計算機シミュレーションを紹介し、水中の生体膜の構造や動力学などの研究例を平易に解説した。次に永田央助教授が「光合成のひみつ・命を支える分子と光」という題名で、分子レベルから見た光合成の仕組みを詳説し、光励起電子移動を利用した金属錯体人工光合成システムの将来展望を示した。最後に小澤岳昌助教授が「光で探る生体分子のはたらき」という題名で、発光生物から取り出した発光タンパク質を生きた動物に注入して、細胞内部のタンパク質の変動を画像観測法で研究するという最新の成果を紹介した。100人近い聴衆が集まり、会場は大変盛況であった。また講演後も多くの質問があった。中には研究者顔負けの専門的な発言もあり、予定されていた15分の質疑応答時間では不足気味であった。アンケートの結果では、どの講演も面白く有益だったという回



中学生以上を対象に作成された宣伝ポスター

参加者で埋め尽くされた公開講演会

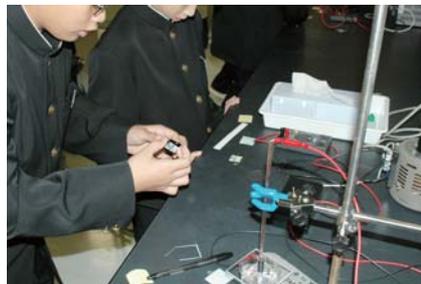


答が95%に達した。

岡崎市内中学生の見学会（通称、サイエンスレンジャー）は、午前中に南実験棟1階で実施された。この会は市教育委員会理科部会との共催で、一般公開する研究所が毎年開催するものである。今年は学生に実験装置を操作してもらい、話題の科学技術を実体験させる事を目標とし以下のテーマを選んだ。(1) 酸化チタン TiO_2 の多色塗装に電気を使う：チタンに電流を流し陽極酸化させ、 TiO_2 の厚みを50

サイエンスレンジャーで
チタン板を手に、実験に取り組む中学生

nm以下で制御し表面を様々に着色する。(2) TiO_2 を色素塗装して電気を起こす： TiO_2 ナノ粒子に花の色素を塗って、可視光を高効率で吸収する色素増感太陽電池を製作する。どちらもナノの科学現象を含み、基本原理が容易で、操作は簡単かつ安全である。また、生活に直結し話題性に富む割に学生実験の題材としては斬新である。開会式で山本教育監の挨拶と講師の紹介があり、その後、219名の中学生が3つのグループに分かれて約50分間ずつ実験を行った。中学生4人に1人の割合で研究所スタッフが補佐に付いたため、トラブルは無く、誰もが楽しそ



うに作業に取り組んでいた。カラフルに着色されたチタン板の出来映えも良く、中学生にも引率教諭にも大変好評であったと聞いている。

参加者数が少ないのではないかと心配されたが、総数2058名の予想を遙かに上回る見学者が訪れている。この中には、東京や山口からの来訪者があった。地元の皆さんの理解を深めることは研究所にとっても大変重要なことであり、多くの皆さんが興味を持って頂いたことは嬉しい限りである。この行事の成功に献身的にご協力頂いたスタッフや学生、事務センターの皆さんに感謝したい。

(西 信之、青野重利、見附孝一郎 記)

News

分子科学会 (Japan Society of Molecular Science) 設立

分子科学分野の主たる研究会の一つとして「分子構造総合討論会」(以下、討論会)があり、毎年多くの研究者や学生の参加を得て活発な討論が行われてきた。一方、分子科学研究所の設立の推進に大きく貢献した「分子科学研究会」(以下、研究会)は、分子科学分野のコミュニティーと分子研を結ぶパイプとしての役割を果たし、独自のメーリングリストによるサーキュラーの発行、講演会の開催などを行ってきた。

両者にはそれぞれ独自の歴史があるが、これらをまとめた新学会設立を求める動きが2004年に始まった。まず、同年9月に研究会側から討論会側の運営委員会に向けて、新学会発足の可能性を探るための議論を始めることが提案された。これを受けて、両組織の合

意のもとで設立検討委員会が設置され様々な角度から議論が重ねられた。その結果、参加者数の増加傾向にある分子構造総合討論会の運営が今までの運営委員会方式ではだんだん難しくなってきたことや、多様化する分子科学分野のプラットフォームとして日常的に情報交換・研究発表の場を持つこと、その場で若手を育成すること、また、分子科学分野からその他の分野の研究者、行政組織、一般社会へ情報を発信し、提言をするためのまとまった組織をもつこと、などの必要性に関する共通認識が持たれた。その後、さまざまな経緯を経て(「分子科学会」設立に至る詳しい経緯は同学会のホームページ<http://www.molsci.jp>にある)、2006年9月20日、静岡における討論会の

期間中に研究会と討論会がマージする形で新学会である分子科学会が設立された。

分子科学分野のプラットフォームを標榜する分子科学会と本研究所がどのような関係を築いていけるかは当該分野の今後の発展に大きな影響を及ぼすと考えられる。同じ「分子科学」を冠する組織ではあるが、研究分野が必ずしも完全にオーバーラップしている訳ではない。また、果たす機能は当然異なる。このような違いはあるが、本研究所と分子科学会とがそれぞれの機能を十分に発揮して、分子科学研究のさらなる活性化がはかられることを期待したい。

(松本吉泰 記)